

日本旧石器学会

ニュースレター 第22号

NEWS LETTER No.22

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION

第5回アジア旧石器協会ロシア大会

長井謙治（東北芸術工科大学）

2012年7月6日から7月12日まで、ロシア・クラスノヤルスクで第5回アジア旧石器協会ロシア大会が開催された。会場はクラスノヤルスク国立教育大学とクルタク考古地区のキャンプ。参加者59名。日本からは小野昭、佐藤宏之、加藤真二が代表として招待され、筆者は追加の招待参加者として参加した。他に、日本から大谷薫、役重みゆきが参加した。なお、本大会は国際シンポジウム「スヤングとその隣人たち、第17回大会」と合同での開催となった。

4日、日本隊は北京空港で中国、韓国一行と合流。5日7:00過ぎにクラスノヤルスク国際空港に到着した。迎いのアナスタシアの案内で市内のホテルへ。12:30に大会登録を済ませ、後日に備えた。

大会1日目、6日の会場は、クラスノヤルスク国立教育大学(Krasnoyarsk State Pedagogical University, KSPU)。V.N.Zenin (ロシア科学アカデミーシベリア支部考古学・民族誌学研究所)、李隆助 (APA会長、韓国先史文化研究院) によるオープニング

アドレスの後、小野昭代表がAPAの歴史と今後の学際色豊かな発展を祈念した。その後、キーノートスピーチが行われた。

Avraham Ronen (イスラエル) は、カルメル山周辺のネアンデルタール及び現代型新人の考古学的証拠を紹介。小野昭 (日本) は MIS3 から MIS2 にかけての中部日本における黒曜石の獲得について、真人原遺跡の事例に基づき、海洋開拓と季節性の関係を指摘した。高星 (中国) は中国における人類進化の連続性について、考古学的証拠から多地域進化説の妥当性を主張して、石刃を現代型新人の技術指標として捉えない「ハイブリッド仮説」を述べた。

遅れて会場に到着した Paul Mellars (英国) は南アジアにおける最初期の現代型新人について、マイクロリスの出現を根拠として南アジアルートを強調した。その他の基調講演は以下の通りである。A.A.Vasilevskiy (ロシア) 「極東半島部への人類拡散の最初期の様相」



写真1 クラスノヤルスク国立教育大学で記念撮影

裴基同（韓国）「韓国旧石器考古学の現在：21世紀に向けた新たな射程」

裴成坤（韓国）「中国南部、Mabaにおけるホミニン化石の幾何学的形態測定分析」

LucynaDomanska（ポーランド）「ポメラニアンフリント：先史時代におけるその使用のあり方を探る」

S.V.Vasiliev（ロシア）「タスマニアの古人類学：その起源問題の解決に向けて」

MichaelJochim（米国）「旧石器時代の人類生態学と石器製作技術」

7日は9:00出発。クルタク考古地区に設営されたKurtakキャンプに移動した。エニセイ河に沿って南へ15分ドライブ。まず、AfontovaGoraII遺跡（クラスノヤルスク市）に到着。遺跡の概要について、ロシア側の開催者より説明を受け、10:00にListvenka遺跡（ディヴノゴルスク市）に到着した。遺跡はリストヴェンカ・ザレチェン川の右岸斜面麓に位置する。計19文化層から出土したそれぞれの遺物と遺構についての解説があった。また、多層遺跡として著名なAfontovaGoraII遺跡については、エニセイ河の二次堆積によって混在出土することなど、ストラテグラフィの難点が指摘された。

夕刻Kurtakキャンプに到着。6:15からロシア勢によるV.N.Zenin、A.I.Krivoshapkin、L.V.Lbova、N.A.Kulikの研究発表が行われた。

翌8日は曇り。9:00スタート。若手セッションを含め15本の研究発表が行われた。途中、ショーがある。若手セッションでは大谷薫が韓国の細石刃石器群の石材利用と技術構造を発表。佐藤宏之は吉井沢遺跡の発掘成果から忍路子型細石刃石器群の遺跡内構造について予察を報告、加藤真



写真2 開会式にて

二は楔形細石刃核の二段階伝播仮説を提唱した。

最新の発掘情報にもとづく研究発表が8本、後期旧石器に対する研究発表が9本、うち遺跡構造論に関する発表が3本あった。現代人的行動の始まりに対する関心は強く、各発表に対して参加者から質問がないことはなかった。

9日の予定は大幅に変更して、エクスカーションと遺物見学。午前はKurtakキャンプから西に20分程、カーメンヌィ谷河口部のダム砂丘上にあるKamennylogを見学した。本大会用に用意された露頭の見学により、ソリフラクションやソイルチャンネル、最低2枚の赤みを帯びた古土壌層が確認できた。10万～30万年前にかけての堆積層が認められるとの説明であったが、遺物の出土層順は明確ではなく、動物相群で年代決定していること、あるいは偽石器様を呈する資料も含まれていることなどから、前期旧石器における石器の認定研究がロシアでも急務であることを実感した。

キャンプに舞い戻った一行は、クラスノヤルスク・クルタク地方の主要な後期旧石器の見学をした。資料を手にとって、自由に実見できたのは大変貴重な機会となった。Listvenka遺跡12層、19層、UstKovaI遺跡、UstMaltatII遺跡、DerbinaV遺跡、Konzhul遺跡、Trifonvka遺跡、KashtankaIII遺跡、KashtankaIV遺跡、KashtankaI遺跡、DerbinaIV遺跡、PokrovkaII遺跡、AfontovaGoraII遺跡から出土した遺物のほか、Razlog、Berezhkovo、Razliv、Kamennylogの表採資料を見学した。

4:00から船に乗り、カシュタンカ考古学地点複合のKashtanka遺跡、Trifonovka遺跡の見学に向かった。ただ、悪天候で座礁の恐れがあるために、上陸を断念。そのまま引き返すことになった。と



写真3 Kurtak キャンプでの発表風景

はいえ、船上からクラスノヤルスクダム河岸に広がって20万年の長きにわたり堆積した地層を眺めることができ、Kamennylog への層序学的な連続性が確認できたのは思わぬ収穫であった。

大会も佳境に差し掛かり、5日目の10日はクラスノヤルスク南部へのバスツアー。初期鉄器時代タガール文化期の Saragash 墓、6世紀の王墓 SalbykBarrow を見学した後、ミヌシンスク博物館を見学した。2グループに分かれて、充実した鉄器の数々など、館内の見学を行った。キャンプに到着したのは10:00頃。それから夕食、就寝。

大会6日目の11日に5本の研究発表が行われた。Marcel Kornfeld (米国) はヘル・ギャップ遺跡を事例とするパレオインディアン期の石器生産戦略、筆者(長井)は鈍角指向の剥片剥離をメルクマールとした OIS3 前半段階における東アジア的石器製作技術の類似性についての仮説を提示した。それから李憲宗、金周龍、朴善周・李隆助の発表が続いた。李憲宗は後期旧石器時代前半期に認められる tanged tool の存在を根拠に、剥片尖頭器の韓国自生説を唱えた。金周龍は九朗窟の形成過程について、朴善周・李隆助は禿魯峰洞窟の動物化石について考古学的検討を行った。共に韓国の洞窟出土遺物の評価に関わるタフォノミー研究であり、貴重であった。

午後はクルタク考古地区、Berezhekovo 地点を

見学した。20m に及ぶセクションは圧巻。湖岸にはトナカイなど大型動物の骨角や石器が散乱しており、破壊の一途をたどるその現状と規模の大きさに各国の参加者は驚きを隠せなかった。

その後、キャンプでディスカッション。1) 現代人的行動の始まり、2) 旧人と新人の交代について、3) 細石刃の定義等が話題になった。

最終日の12日は N.I.Drozdov、李隆助・禹鐘允の総括があり、小野昭新会長就任挨拶で幕を閉じた。

9日間という短くも長い滞在であったが、アウトホームな学会的雰囲気は、目的を同じくする国外研究者との垣根を越えた交流の場として、最適な空間を演出していたと感じる。ここに書ききれないほどの熱い議論や娯楽が盛んに繰り広げられたのも事実である。

もちろん、スケジューリングが場当たりので、参加者が戸惑う場面も多々見られた。しかし、日夜を共にするキャンプで柔軟な形で進行された本大会においては、発表者と参加者の距離が近く、それが結果的に熱い議論に花を咲かせていたように思う。

本大会への日本からの参加者は決して多くはなかったが、今後ますますの若手が奮勇をふるって参加されることを願いたい。



写真4 クルタク考古地区、Berezhekovo 地点見学

日本旧石器学会シンボルマークの募集 について

このたび、日本旧石器学会では、2013年の発足10周年を迎えるにあたり、学会のシンボルマークを作成することにいたしました。ふるってご応募ください。

1. 募集内容 日本旧石器学会のシンボルマーク
2. 募集期間 (必着)
2013年1月20日(日)～2013年3月31日(日)
3. 応募資格
日本旧石器学会員か、学会員の推薦がある方。
4. 応募方法・規定
 - ・応募については、必要事項(氏名、年齢、職業、郵便番号・住所、電話・FAX番号、メールアドレス、作品の解説、学会員以外は推薦者)をご記入の上、郵送もしくはメールにより下記の事務局あてに作品とともに送付して下さい。
 - ・作品は、電子データ、紙のいずれでも提出可能です。電子データの場合：ファイル形式は、J P E G又はG I F形式とし、画像サイズは 2 M B (メガバイト) 以内とします。(イラストレータ・フォトショップは受付不可) 紙の場合：A 4 サイズ白色用紙を縦に使用し、作品を10 c m四方の枠内に描いて下さい。
 - ・応募作品数は1人1作品とします。
5. 注意事項
 - ・応募作品は、未発表かつ自作の作品に限ります。
 - ・応募作品は、返却いたしません。
 - ・入賞作品の著作権は、日本旧石器学会に帰属します。
 - ・最優秀作品は、今後、日本旧石器学会の学会活動・広報・啓発等に広く使用する予定です。
 - ・最優秀作品は、必要に応じて修正を加えた上で、使用することがあります。
 - ・他の作品の模倣と認められる場合には、入賞決定後であっても賞を取り消すことがあります。また、類似と認められる作品も賞を取り消す場合があります。
6. 審査 日本旧石器学会役員
7. 発表
入賞作品は、2013年6月の日本旧石器学会総会において発表し、その後、学会HPにて公開します。
8. 入賞
 - ・最優秀賞1作品、優秀賞1作品を決定します。
 - 賞金 最優秀賞3万円 優秀賞1万円
 - ・入賞作品は、2013年6月の日本旧石器学会総会で発表。
9. 個人情報の取扱い
応募用紙等に記載された個人情報は、本公募に関連する用途以外には使用いたしません。
10. 事務局・応募先・照会先
日本旧石器学会 広報委員会 堤 隆
〒389-0207 長野県北佐久郡御代田町馬瀬口1901-1
浅間縄文ミュージアム気付
TEL 0267-32-8922 メール jomon@mx2.avis.ne.jp

日本旧石器学会研究グループの募集 について

2013年度日本旧石器学会研究グループを募集します。研究グループは、旧石器考古学およびこれに関連する研究課題について国内・国外の情報を交換し研究することを目的とします。グループには一定の範囲内で運営費を補助します。募集期間は2013年3月31日までです。応募・問い合わせは、事務局までお願いします。

日本旧石器学会普及講演会 「ネアンデルタール人再発見の物語 と日本の旧石器研究」開催報告

2012年7月29日(日)、明治大学リパティタワーにおいて、日本旧石器学会普及講演会「ネアンデルタール人再発見の物語と日本の旧石器研究」が開催された。普及講演会は、明治大学黒耀石研究センターとの共催で、一般の方々に旧石器時代のことをよく知っていただくことを趣旨としている。講師は小野昭日本旧石器学会長、猛暑の1日ではあったが、60名の一般参加者があった。

ネアンデルタール人の模式標本は、1856年小フェルトホーファー洞窟で発見されたが、産業革命期の石灰岩採掘をへて大きな地形変化がなされ、その場所がまったくわからなくなってしまっていた。

発見から143年後の1999年、ドイツの考古学研究者シュミッツとティッセンによってようやくその場所が特定された。その再発見をめぐる物語と日本の旧石器研究についての講演会である。

話のあらまはは、1：日本の旧石器研究、2：ネアンデルタール人をめぐるいくつかの話題、3：ネアンデルタール人発見の歴史的経緯、4：ネアンデルタール人の道具、5：多様な分析と追及(発掘・DNA・古病理・14C年代)、6：シュミッツとティッセンの追及などであった。ネアンデルタール人再発見は、あきらめずに研究をつづけることが可能性につながることを、われわれに教えてくれている。

(日本旧石器学会広報委員会)



写真5 日本旧石器学会普及講演会の様子

戸沢充則先生追悼シンポジウム
「細石刃石器群研究へのアプローチ」
開催報告

2012年7月7日(土)・8日(日)長野県浅間縄文ミュージアムにおいて、同年4月に逝去された明治大学名誉教授戸沢充則先生を追悼し、シンポジウム「細石刃石器群研究へのアプローチ」が開催された。

主催は八ヶ岳旧石器研究グループ、共催は明治大学黒耀石研究センターと浅間縄文ミュージアムである。参加者は80名、内容は以下のとおりである。

特別講演

旧石器時代のビーナス像

春成秀爾(国立歴史民俗博物館名誉教授)

研究発表

- 1 戸沢充則先生の考古学研究と矢出川遺跡群総合調査
大竹憲昭 / 大竹幸恵
(長野県埋蔵文化財センター / 黒耀石体験ミュージアム)
- 2 細石刃はどんな道具となったか
須藤隆司(明治大学黒耀石研究センター)
- 3 矢出川遺跡における細石刃石器群の産地構成
堤 隆(八ヶ岳旧石器研究グループ)
- 4 九州における細石刃集団の移動領域と石材供給システム
芝康次郎(奈良文化財研究所)
- 5 関東地方細石刃文化の集団を考える
仲田大人(青山学院大学)
- 6 北海道の細石刃石器群について - 発生から展開へ -
中沢祐一(北海道大学)
- 7 古本州島における細石刃石器群の年代と古環境
工藤雄一郎(国立歴史民俗博物館)
- 8 ニホンジカの生態とそれを活かした鹿笛猟
南正人(麻布大学 / NPO 法人あーすわーむ)

最後に、パネルディスカッションがなされ、細石刃石器群研究への接近法が議論されたが、矢出川遺跡群総合調査をはじめとする戸沢充則先生の旧石器研究の意義についても振り返るよい機会となった。

(八ヶ岳旧石器研究グループ)



写真6 「細石刃石器群研究へのアプローチ」の討論の様子

第16回石器文化研究交流会
山梨大会 開催報告

2012年9月29日(土)・30日(日)に第16回石器文化研究交流会が行われた。今年度は山梨県考古学協会・帝京大学文化財研究所/公益財団法人山梨文化財研究所との共催で行われ、山梨文化財研究所講堂が会場となった。参加人数は2日間で47名であり、2日目の午後は台風の接近に伴い嵐となったにもかかわらず、多くの方にご参加いただいた。

内容は第1部が遺跡調査・整理速報、第2部がミニシンポ「礫群の初源とその様相」の2部構成で進められ、第1部では4遺跡の発表が行われた。

最初は神奈川県上草柳遺跡群大和配水池内遺跡の十数年もの整理事業と報告書刊行を受けての報告が麻生順司氏によって行われた。14枚もの文化層が確認された重層遺跡であり、各文化層は相模野編年の各期・各段階の様相を特徴的に示していることが報告された。

次に静岡県宮林遺跡の整理速報が笹原芳郎氏によって行われた。伊豆半島の南半で初めて確認された旧石器時代の重層遺跡であり、AT降灰前の層位で複数の土坑とピエスキューなどの石器群が確認された。土坑は愛鷹・箱根山麓で第Ⅲ黒色帯から見つかる土坑と同時期と推定された。また、石器群は出土層位から約3万6千年前と推定されることが報告された。

次に神奈川県小倉原西遺跡の調査速報が中川真人氏によって行われた。この遺跡はかながわ考古学財団と相模原市が隣接して発掘を行い、財団調査ではB1層中で5基の石器ブロックと3基の礫群が、市調査ではB0層中で3基の石器ブロックが確認された。周辺地域では同一層準で遺跡が確認されており、今後の整理が期待されている。

最後に神奈川県相模原市当麻遺跡第1地点の調査速報が大塚健一氏によって行われた。出土した石器群は3文化層に区分され、それぞれ細石刃、尖頭器、ナイフ形石器を主体としている。特に第Ⅰ文化層は細石刃の生産をおこなっている特徴的な遺跡であることが報告された。



写真7 第16回石器文化研究交流会場の様子

また、誌上発表であるが栃木県西刑部西原遺跡の報告が亀田幸久氏によって行われた。4箇所の石器ブロックが礫群を伴って検出されており、尖頭器・搔器・削器を主体としている。石材は信州産黒曜石を主体としており、周辺地域では珍しい事例として紹介された。

第2部の研究討論会「礫群の初源とその様相」では基調講演、各地の様相、討論会が行われた。基調講演は「礫群研究の意義とその可能性—石蒸し調理実験から—」という表題で鈴木忠司氏によって行われた。副題のとおり、鈴木氏は関東近県の石材を使って、10年以上にわたる石蒸し調理実験をおこなっている。実験では玄武岩などのほとんど割れない石材と、砂岩などの使用回数を増すごとに割れが進行していく石材に分かれることが明らかになり、各地の様相が利用される石材によって左右されている可能性が指摘された。また、10個以下の小規模な礫群では石蒸し調理を行うことが難しく、別な使用方法（例えばストーンボイリングなど）も考慮に入れ実験を行うことも示された。今後は、実験結果を集落遺跡に当てはめていくということで、今後の研究に期待したい。

次に各地の様相について発表が行われた。発表地域、発表者は以下のとおりである。山梨県（松村佳幸氏）、愛鷹・箱根山麓（柴田亮平）、磐田原台地（富樫孝志氏）、栃木県（芹澤清八氏）、茨城県（川口武彦氏）、群馬県（麻生敏隆氏）、千葉県（島立桂氏）、埼玉県（高屋敷飛鳥氏）、武蔵野台地・多摩丘陵（比田井民子氏）、神奈川県（諏訪間順氏）。山梨県を除いて、各地域ともAT下位より礫群が確認されているが、その初源については武蔵野Ⅶ層段階の地域とⅨ層段階の地域に区分されることが確認された。また、初源の礫群は各地ともAT上位の礫群と比較して小規模であったり、礫群と呼べるか判断に迷う資料が多いことが報告されている。

討論会は上記の地域に長野県を加えて展開された。まず共存する石器群について、武蔵野Ⅸ層（X層上部）段階の礫群は、どの地域でも環状ブロック群には伴わないことが示された。初源期に比べ武蔵野Ⅳ・Ⅴ層段階では礫数の多い大規模な密集型礫群が目立つことが指摘されていたが、地域により様ではないことが明らかになった。例えば茨城県や大宮台地などでは、旧石器時代全般を通じて、礫群の少なさ、規模の小ささが挙げられた。また、南関東の礫群が武蔵野Ⅳ下・Ⅴ上層段階で発達するのに対して、愛鷹・箱根山麓では砂川期に検出量が増大することについては、そもそもの遺跡数と連動している現象と考えられ、集団の移動など広い視点を持った研究の重要性が改めて指摘された。

討論会で多くの方が指摘していたのは、礫群を研究していくことの重要性と新たな視点の必要性であった。これまで開かれていなかった礫群をテーマとした研究会が開催されたこと、各地の様相を一堂に集めることができたことが今回の成果として強調される。ともすれば研究のメインテーマとして取り上げられることの少ない礫群であるが、列島各地で確認され、検出時期も長期にわたる遺構である。今回の交流会の成果を今後の旧石器研究の新たなステップ

とするよう、本研究会も邁進していきたい。

本交流会の発表要旨も含まれた『石器文化研究』18号を2,000円で配布しています。詳しくは石器文化研究会HP (<http://www.sekki.jp/>) をご覧ください。（柴田亮平）

第29回中・四国旧石器文化談話会 「愛媛県における旧石器文化の様相」 開催報告

2012年10月13日（土）・14日（日）の両日、愛媛県歴史文化博物館（愛媛県西予市）において、中・四国旧石器文化談話会の主催により、第29回中・四国旧石器文化談話会が開催された。

今回の研究会のテーマは「愛媛県における旧石器文化の様相」である。これは当談話会が第21回からの統一テーマとしている、開催県の既発見資料の集成・再検討を通して、研究の現状把握と今後の研究の課題を共有しようとするものである。そのため、今回は、基調報告を可能な限り県内研究者でと考える、発表の依頼を行った。なお、西南四国地域でこれまで精力的に旧石器資料の探索と公開に御尽力され、先年他界された故木村剛朗氏の収集資料が、開催地である歴史文化博物館へ寄託されたという経緯もあり、これら木村資料の再評価も今研究会のひとつの狙いとした。

参加者数は中・四国を中心に、30名を超える盛況ぶりであった。両日のプログラムは、次のとおりである。（以下、発表者は敬称略。）

第29回中・四国旧石器文化談話会「愛媛県における旧石器文化の様相」

会場：愛媛県歴史文化博物館研修室（愛媛県西予市）

第1日目 10月13日（土）

開会行事

調査事例報告1：「鳥取県豊成叶林遺跡の発掘調査」高橋章司（鳥取県埋蔵文化財センター）

講演：「愛媛県旧石器文化研究の現状と課題」十亀幸雄
遺物見学（宝ヶ口I遺跡、東峰遺跡第2・4地点、高見I遺跡、水戸森遺跡、故木村剛朗氏寄託資料）

基調報告1：「愛媛県における旧石器文化の様相」多田仁（（公財）愛媛県埋蔵文化財センター）



写真8 第29回中・四国旧石器文化談話会研究会風景

基調報告2：「愛媛県宇和盆地における後期旧石器時代以降の環境変遷史」杉山真二（古環境研究所）・早田勉（火山灰考古学研究所）・金原正子（古環境研究所）・多田仁

各県近況報告（閉会后、西予市内で懇親会）

第2日目 10月14日（日）

調査事例報告2：「広島県庄原市只野原4号遺跡の発掘調査」荒平悠（庄原市教育委員会生涯学習課）・沖憲明（広島県教育委員会事務局文化財課）

基調報告3：「和口遺跡の旧石器時代遺物」多田仁
遺物見学

質疑・討論（司会：氏家敏之（（公財）徳島県埋蔵文化財センター）

閉会行事

調査事例報告1では高橋章司が、2011年に発掘調査が実施された鳥取県西伯郡大山町所在の豊成叶林遺跡を紹介した。石器群はA T下位に帰属する玉髓製二側縁加工ナイフ形石器を主体とするもので、263点の石器が2箇所の石器ブロックを構成する。調査では、包含層掘削段階で微細遺物の検出と記録に極力努め、それらの分布状況と接合関係から、遺跡内での微視的な空間機能の把握と人間行動の復元を行い、石器製作時の「剥離の座」や石器の「選別・交換・使用の場」の特定を試みた。

講演では十亀幸雄が、県内における旧石器研究の黎明期から現在までの研究史を振り返り、その展開と課題、および今後の展望を述べた。

基調報告1では多田仁が、愛媛県における旧石器編年の試案を提示した。編年は4期区分で、A T降灰以前の石器群→瀬戸内技法および角錐状石器を保有する石器群→小型ナイフ形石器・小型角錐状石器を主体とする石器群→細石刃石器群という変遷を想定した。

基調報告2では早田勉が、愛媛県西予市宇和町所在の上井遺跡における火山灰分析および花粉分析、植物珪酸体分析、種実同定の結果から想定される宇和盆地周辺における古環境の変遷過程を述べた。

続く2日目の調査事例報告2では、荒平悠と沖憲明が、広島県庄原市高野町所在の只野原4号遺跡の紹介を行った。出土遺物はA T層上下の古土壌に含まれる、明確な加工痕・使用痕を持たない礫735点であり、これらの礫の人為性に



写真9 第29回中・四国旧石器文化談話会質疑討論風景

関して、周辺の試掘データから想定される旧地形の復元、および周辺遺跡での礫の出土状態から検証を行い、一部について人為物である可能性を示した。

基調報告3では多田仁が、愛媛県南宇和郡愛南町所在の和口遺跡の旧石器時代遺物の概要を報告し、出土遺物にみられる特徴を整理した。

質疑・討論では、主に多田・早田両名の発表内容を軸に活発な議論が展開した。多田の編年案に関しては、四国内で唯一のA T下層出土石器群である東峰遺跡第4地点の編年の位置付けが問題となり、会場内で武蔵野編年X～IX層段階とする意見とVII～VI層段階とする意見が交錯した。A T上位石器群に関しては、瀬戸内技法の存続期間、小型ナイフ形石器の編年の位置付けに関して再考の余地があることが指摘された。また、早田からはA T火山灰に関する最新の研究成果の補足があり、それに関して活発な質疑・応答が繰り返された。

遺物見学では、県内の主要な発掘調査資料のほか、故木村剛朗氏の採集資料、調査事例報告のあった只野原4号遺跡の遺物展示等もあり、実資料に基づいた意見交換が活発に行われた。今後の劇的な資料増の見込めない現状において、既存資料の再検討がいかに必要かを痛感させる、非常に有意義な会となった。（池尻伸吾）

2012年度委員会中間報告

総務委員会 総務委員会は委員3名（役員2名、委嘱1名）で構成し、2012年6月の総会をもって前任者から引き継いだ。通常業務として、総会会場の設営・連絡調整、会務に関する連絡調整、会誌・ニュースレターの発送、会員に関する事務を行っている。

日本旧石器学会研究グループについては、新たに「南アジアの旧石器時代遺跡研究グループ」（研究代表者：野口淳）を採択し、当該研究グループの設置および運営費の交付を承認した。

また、「旧石器研究」8号の発送を行い、ニュースレターNo.21の発送をニュースレター委員会の協力により印刷会社に委託した。総会時に示された課題として、学会10周年事業の学会奨励賞制定、会員メーリングリストの設置、役員任期の見直しについて検討を行い、引き続き協議を進めている。2013年度の総会・大会の会場については、2013年6月15・16日の予定で東海大学湘南校舎を候補に東海大学考古学研究室と調整を行っている。

会計委員会 6月の総会開催に伴う会計行為に加え、収入では会費収入・印刷物頒布代金収入があり、支出では印刷費支払（会誌・予稿集・ニュースレター）、諸謝金払出、研究グループ運営経費の支出を行っている。

今年度の会費納入者数は、12月15日時点で181名（会員数246名）であり、65名の未納者を数える。昨年度以前の会費の未納者も31名に上っており、未納会費の回収が課題である。

会誌委員会 現在、会誌『旧石器研究』第9号の編集作業を進めている。次号の構成は保年6月に開催された第10

回大会シンポジウム「旧石器時代遺跡・立地・分布研究の新展開—『日本列島の旧石器時代遺跡』データベースの到達点と展望—」に関連する報告・論文と一般投稿論文等からなる予定である。

ニュースレター委員会 第21号、第22号の編集・発行を行った。主な内容は下表のとおり。

第21号 日本旧石器学会第10回大会の開催(報告)、2011年度委員会報告、2012年度活動計画、会則等の一部改正について、2012年度役員会(役員紹介)、関連学会情報(石器文化研究会、岩宿フォーラム、九州旧石器文化研究会、『交代劇』国際シンポジウム、信州黒曜石フォーラム、)おしらせ

第22号 本紙

渉外委員会 2012年度APA大会は、7月6日から12日まで、ロシア・クラスノヤルスクで開催され、日本からは6名が参加した。詳細は、本号長井会員の報告を参照されたい。大会中にAPA執行委員会が開かれて、次期APA会長として、小野昭氏が選出された(任期2012～2014)。APA会長の所属国執行委員から、General Secretaryを任命することになっており、阿子島香が務めることとなった。2013年度第7回APA大会については、中国の水洞溝において開催することが決定された。6月下旬予定で、中国側で調整している。

データベース委員会 ①JPRA-DBの課題をまとめる。②検討課題に対して、インターネット上での公開を目標に詳細事項を決定する。具体的な課題としては、a. データベース入力協力者の継続・交代・引継ぎ、b. データベースの修正作業にあたっての総合的な管理、c. データベース利用条件、d. データベース新項目の設定、e. バージョンアップの時期(期間)、などがある。③また、旧石器研究誌上に、「日本旧石器学会第10回講演・研究発表シンポジウム「旧石器時代遺跡・立地・分布研究の新展開」について学会参加記をまとめ、掲載する予定。ここで、シンポジウムを踏まえた上で、成果と課題について記載する。

平成24年度「ひろしまの遺跡を語る」 開催のお知らせ

テーマ 中国山地の旧石器文化を考える—移動生活と運ばれたモノ—

主催 (財)広島県教育事業団

開催日 2013年1月19日(土)10:00～16:30

会場 広島県民文化センター多目的ホール
(広島市中区大手町一丁目5-3)

内容

事例報告Ⅰ「和知白鳥遺跡(三次市和知町)の発掘調査」

山田繁樹(財)広島県教育事業団

事例報告Ⅱ「只野原3号遺跡(庄原市高野町)の発掘調査」

青山透(同)

研究発表「備北地域の旧石器時代遺跡」辻満久(同)

基調講演Ⅰ「旧石器時代の環境とくらし」

藤野次史(広島大学総合博物館)

基調講演Ⅱ「山陰から中国山地の旧石器文化」

丹羽野裕(島根県古代文化センター)

シンポジウム(コーディネーター 藤野次史、パネラー

丹羽野裕・山田繁樹・青山透・辻満久)

関連遺物の展示(多目的ホールロビー)

事前申込不要・入場無料。詳細は、(財)広島県教育事業団埋蔵文化財調査室HP(<http://www.harc.or.jp/>)で紹介されています。

2013年度 研究発表・ポスターセッション 発表の募集について

2013年6月15・16日に開催される総会での研究発表・ポスターセッション発表を募集します。

詳しくは追って、日本旧石器学会HPにおいて掲載しますので、奮ってご応募ください。

会費納入のお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されているため、会費は原則前納とさせていただいております。会費未納の方々につきましては、速やかに所定の会費の支払い手続きをなされますよう、お願い申し上げます。年会費は5,000円で、振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。(全国の郵便局にて簡単に振込いただけます。なお払込取扱票が必要な方、会費入金状況を確認なされたい方は、お気軽に下記事務局までご連絡ください。)

住所変更のお願い

転居をされた方は必ず住所変更の手続きをお願いいたします。事務局までメール等でご連絡ください。

編集後記

各地域で行われてるシンポジウム等については宣伝および開催報告をできるだけ掲載するようにしています。今年度に関しては行事が多くて載せ切れていない実情がありますが、今後も当学会に関わる情報を会員の皆様からお寄せいただければ幸いです。(谷)

日本旧石器学会ニュースレター
第22号
2012年12月29日発行
編集:日本旧石器学会ニュースレター委員会
谷和隆・沖憲明・高倉純
発行:日本旧石器学会
事務局:首都大学東京 山岡拓也
〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1
首都大学東京 都市教養学部歴史・考古学分野内
E-mail jpra_2003@ay.em-net.ne.jp
HP <http://palaolithic.jp/index.htm>